第1章 No.07

石井亮一

日本で最初に知的障がい児教育を手がけた

「知的障がい者教育・福祉の父」と呼ばれている石井亮一。彼が始めなければ、日本の知的障がい者教育はずっと遅れたのではないかと言われています。

石井亮一・筆子夫妻　「日本の知的障がい者教育・福祉の父」と呼ばれる亮一とその妻・筆子。（社会福祉法人滝乃川学園提供）

青年期に二度の挫折を経験

石井亮一は、1867（慶応3）年、現在の佐賀市で佐賀藩士である石井家の六男として誕生しました。

亮一は、1874（明治7）年に佐賀の勧興小学校、1879（明治12）年1月に佐賀中学校の邦文科に入学しました。しかし、10月に校内に洋学所が設けられると、英文科に転科しました。

亮一は、反射炉や造船など、基礎としての理化学研究や英語に興味を持ちました。

亮一は、学業優秀な学生として鍋島家から奨学金を受けて、1883（明治16）年9月に工部大学校受験を目指して上京しましたが、幼少時からの病弱な体が理由で、体格検査で不合格となります。そこで亮一は、コロンビア大学で応用化学を専攻する道を目指すことにし、その準備のために、1884（明治17）年、**立教大学校**に入学しました。亮一は、ここでキリスト教と出会いました。この出会いが、亮一のその後の人生に大きな影響を与えました。

卒業後、渡米のための健康診断で「今の健康状態では海外留学に耐えられない」と診断され、渡米を断念せざるを得なくなりました。病弱な体のため、2度も挫折を経験することになったのです。

調べてみよう
亮一の妻の筆子は、どんな人なんだろう？

女子教育から孤女教育、そして知的障がい児教育へ

1890（明治23）年、亮一は、立教女学校の教頭として招かれました。その翌年の10月28日に岐阜県・愛知県を中心に**濃尾大震災**が発生しました。

震災で家と両親を失った少女たちの中には、誘拐され、人身売買される者もいました。この状況を知った亮一は、**孤女教育**への使命を感じたのです。

両親を失った少女たちを受け入れるために、まず、理解者である**志方之善**の協力を得て、その妻・**荻野吟子**の医院の一部を借りて、12月1日**「孤女学院」**を開設しました。そして、翌年の3月、滝乃川村（現在の東京都北区）の施設に移りました。

孤女学院で亮一は、知的障がい児に出会います。亮一は、知的障がい児にも「神の子」として等しく教育を受けさせる必要性を強く感じましたが、当時の日本には**知的障がい児教育**に関する資料がありませんでした。

そこで、1896（明治29）年と1898（明治31）年に、知的障がい児教育を学ぶために２度渡米します。知的障がい児学校を訪れ、知的障がい児の実態を知り、障がいの程度に合わせた教育（例えば、重度の場合には衛生面の指導、中度の場合には自然の中での野外活動）などを学びました。

（社会福祉法人滝乃川学園提供）

石井 亮一
1867（慶応3）年～1937（昭和12）年

（社会福祉法人滝乃川学園提供）

石井 筆子
1861（文久元）年～1944（昭和19）年

（社会福祉法人滝乃川学園提供）

孤女学院時代の子どもたち
子どもたちは封筒作りの作業を行っています。

1回目の渡米から帰国した亮一は、本格的な知的障がい児教育に専念するために、孤女の受け入れを中止し、学園の名称を**「滝乃川学園」**に変更しました。日本初の**知的障がい児施設**の始まりです。

滝乃川学園の次に知的障がい児施設ができたのは、それから13年後のことでした。これ以降に知的障がい児施設が広がったことから、亮一が始めなければ、日本の知的障がい者教育はずっと遅れていたのではないか、と言われています。

滝乃川学園は亮一の個人経営であり、常に経営難に悩まされていました。何度も学園閉鎖の危機に直面していましたが、妻・**筆子**をはじめ、多くの支援者を得て、1920（大正9）年、**財団法人滝乃川学園**となりました。1928（昭和3）年に広

滝乃川学園の授業の様子（社会福祉法人滝乃川学園提供）
知的障がい児施設になってから、男子の受け入れも始まりました。

COLUMN

一生で一度の嘘

亮一は佐賀中学校入学時、数え年で12歳でした。佐賀中学校に入学できる年齢は数え年で13歳だったので、願書の年齢を「十三才」にして出願し、合格しました。このことを亮一は「一生で一度の嘘」と告白しています。

COLUMN

滝乃川学園を支援した人々

勝海舟は、幕末・維新期に筆子の父や叔父との交流があり、筆子の事業に理解を示していたこともあり、滝乃川学園設立時から支援をしていました。滝乃川学園３代目理事長には、「日本資本主義の父」と呼ばれている渋沢栄一が就任しました。滝乃川学園は、大正天皇の頃から皇室の支援もありました。

COLUMN
亮一を支えた妻・筆子

筆子は大村藩士の娘で、教育者でした。亡くなった前の夫との間の子どもが虚弱児だったため、亮一の活動に理解を示し、バザーや観劇会などを開いて資金集めを行いました。経営費の3分の1は筆子がまかなっていたと言われています。

そんな筆子の生涯を映画化した『筆子・その愛』という作品があります。

（社会福祉法人滝乃川学園提供）

農作業をする子どもたち
知的障がい児を農業に親しませ、自活の道を探ることを目的に農園をつくりました。当時のアメリカの知的障がい児教育を参考にしたものでした。

い土地を求めて谷保村（現在の東京都国立市）に移転しました。

亮一の生涯を貫いた道しるべ

亮一には座右の銘がありました。

いと小さき者に為したるは、すなわち我に為したるなり
（社会的立場が弱い者にすることは、つまり、神にすることである）

これは聖書の言葉です。この言葉があったからこそ、亮一は女子教育、孤女教育、知的障がい児教育の重要性とその使命を感じていました。

もう一つ、聖書の言葉からの座右の銘がありました。

愛は寛容にして慈悲あり
愛は誇らず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念わず
凡その事忍び、凡その事望み、凡その事耐ふるなり
（愛は寛容であり、情け深い。愛は誇らない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない。すべてを忍び、すべてを望み、すべてを耐える）

亮一の死後、遺品の中からこの言葉が書かれた自筆の書が見つかりました。自分のことは多く語らなかった亮一でしたが、彼の座右の銘は現在も滝乃川学園に語り継がれています。

学校の取組
【ナーミー活動】

佐賀県立中原特別支援学校

中原小学校3年生、中原中学校1年生と地域の方々200人ほどで、年に2回、20年もの間、ゲーム等を行い楽しく交流を深めています。

調べて書いてみよう！
石井亮一の他に知的障がい教育、福祉に尽力した人は誰がいるでしょうか。調べて書いてみましょう。

読んでみよう！
シリーズ福祉に生きる『石井亮一』
大空社刊

映画『筆子・その愛』
2007年/現代ぷろだくしょん

出かけてみよう！

社会福祉法人滝乃川学園石井亮一・筆子記念館
（国登録有形文化財指定）　（東京都国立市谷保6312）
滝乃川学園内にある、石井亮一・筆子や滝乃川学園の資料が展示されている記念館。元は滝乃川学園の研究活動の中心として使われていた建物です。
TEL 042-573-3950／**休館日** 土曜日・日曜日・祝日／**開館** 9:00～17:00
（社会福祉法人滝乃川学園提供）

検索してみよう！
パンフレット特別支援教育
女子教育　歴史
ヘレンケラー